様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：２４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４６３２４７

研究課題名（和文）メタ認知的アプローチによるロールモデルを用いた看護教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of nursing education program using role model by metacognitive approach

研究代表者
水田　真由美（Mizuta, Mayumi）

和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授

研究者番号：００３００３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、メタ認知的アプローチにより看護学生が臨床現場に適応するためのロールモデルの形成を目指した教育プログラムを開発することを目的とした。その結果、看護学生は身近な存在からロールモデルを見出し、模倣し、振り返り試行錯誤しながら、目標へと近づく努力をしていた。一方、現状に精一杯で目標を見出せない者も存在するため、適宜、目標設定できるように教育的な関わりが重要であることの示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to develop an educational program aimed at supporting nursing students in adapting to the clinical environment to find a role model by metacognitive approach. As a result, nursing students were making efforts to achieve their goals while finding a role model around themselves, imitating the behaviors, and reflecting on themselves through trial and error. Meanwhile, for students making the utmost effort only to cope with the present situations and not being able to find a goal to achieve, we got the suggestion that educational involvement by teachers is important so that the goal can be set appropriately.

研究分野：基礎看護学

キーワード：ロールモデル　看護教育　メタ認知

１．研究開始当初の背景

ロールモデルを獲得し自ら学ぶことの重要性が指摘される中、ロールモデルは情意的な効果や目標設定の指針になるというポジティブな側面をもつことが示されているものの、限界も示唆されている。Wiseman (1994)はロールモデルを模倣しても臨床能力が向上するとは限らないことを報告した。この点からロールモデルは模倣のように学びの対象となるのではなく、自己の内面に取り入れて、自己の行動を振り返る際の比較対象あるいは基準として機能することによって効果をなしうると考えられる。

これまでに、我々は学生の自己の行動を振り返ること、自己焦点化がロールモデルの選択に及ぼす影響を調べた（鍋田ら,2013）。学生は自己焦点化あるいは他者焦点化のいずれかを行った後に、ロールモデルにとって重要な行動を選択した。その結果、自己焦点化した学生において、自分のストレス管理についての項目を重要だと選択する傾向が認められた。自己の行動に意識を向けることで現実の文脈を意識したロールモデルが形成されることが示唆され、自己焦点化を支援することの重要性を明らかにした。次に、実習経験を経ることで、ロールモデルとしてふさわしい行動や特性を達成するためにどのように努力を調整するのかを検討した。その結果、実習経験により限定された行動や特性を達成するために多くの努力をするように調整することが明らかとなった（鍋田ら,2015）。

看護は対象により状況が変わることがあり、それに基づいて意識的に目標を変える必要がある。また、卒後は看護師として成長するための目標があるが、多くの目標を自分にあった目標に修正していく必要がある。目標が膨大であったり、暗黙的である場合、意識的に目標を変えることができない。また、看護師は日々緊張した実践を行っており、常にストレスにさらされる。こうした状況で習慣的に目標を考えることが重要である。

そこで、学生のうちに看護師としての成長を育むことができるような目標を立てられるように、成長の目標となるロールモデルを立てる経験をメタ認知的アプローチにより、意識的に目標をもって成長できる能力を育成することを目指したプログラムを設計することを目的とする。

２．研究の目的

本研究は、メタ認知的アプローチにより看護学生が臨床現場に適応するためのロールモデルの形成を目指した教育プログラムを開発することを目的とする。

３．研究の方法

（１）看護学生のロールモデルの形成および活用の検討

対象:A看護系大学に所属する４年生14名。

時期：2015年3～4月。

方法：1グループ5名程度でフォーカスグループを実施した。「ロールモデルとして認識する看護師あるいは看護師の行動はどのようなものか」「どのようにロールモデルを活用するのか」「どのように目標を作り出すのか」などインタビューした。インタビュー時間は約１時間。分析は会話内容を録音したものから逐語録を作成し、質的記述的に行った。

（２）方法２：新人看護師のロールモデルの活用プロセス

対象：A看護系大学を卒業した2年目看護師3名によるフォーカスグループを実施した。入職１年目および学生時代を振り返ってもらい、「ロールモデルとして認識する看護師あるいは看護師の行動はどのようなものか」「どのようにロールモデルを活用するのか」「どのように目標を作り出すのか」などをインタビューした。インタビュー時間は約１時間。分析は会話内容を録音したものから逐語録を作成し、質的記述的に行った。

（３）方法３：看護学生へのキャリア形成に向けた取り組み

対象：A大学看護系学部2年生80名

時期:2017年１月

方法:看護学生のキャリア形成支援としてロールモデルとなる5～7年目の看護師2名と助産師１名に大学卒業後から現在の活動を語ってもらい学生と交流を行うプログラムを実施した。時間は90分である。

プログラム参加後の学生の自由記述による感想を質的分析した。分析は記述内容から類似した意味内容に合わせ分類した。分析は研究者間の合意が得られるまで行った。

倫理的配慮：研究への参加はすべて自由参加であり、研究への参加・不参加で不利益のないこと、調査結果についても研究以外の目的に使用しないこと、データの取り扱いについてプライバシーの保護に十分配慮することについて説明を行った。学生には、強制力がかからないように、成績に影響しないことを説明した。

４．研究成果

（１）看護学生のロールモデルの形成および活用の検討

看護学生がロールモデルとして認識する看護師および行動は、【患者にとって何が大事かを考えて行動する】【向上心がある】【楽しみながら働く】【忙しくても忙しさを患者に感じさせない】【余裕がある】【話しやすい雰囲気がある】【冷静な判断と的確な対応】【誰からも信頼される存在】等が見出された。それらのロールモデルについて【身近な存在からモデルをみつける】【いいなと感じる】【見てまねる】【積極的に相談し助言を受ける】【長期目標に向かって短期目標をもつ】

【優先順位を考えて行動する】といった行動をとる一方、【目標への期待と不安】を感じ、【目標がわからない】【受動的行動をとる】者も認めた。また、ロールモデル（目標）に向かって【経験と知識を積む】【振り返り試行錯誤する】【自分を知り自分にあった方法をみつける】等の認識をしていた。

看護学生は身近な存在からロールモデルを見出し、模倣し、振り返り試行錯誤しながら、目標へと近づく努力をしていた。一方、現状に精一杯で目標を見出せない者も存在するため、優先順位を考え、できることから目標設定するような教育的な関わりが大切であることの示唆を得た。

（２）新人看護師のロールモデルの活用プロセス

新人看護師のロールモデルの活用は、【学生時代のモデル】はあるものの【1 年目は仕事に必死】で【現実を知る】。そこから、【先輩に目を向ける】ことで【それぞれの良いところを発見しモデルとする】。また、【特定のモデルはいない】がそれぞれの【良い行動を取り入れモデルに近づく努力をする】。【変化する目標】に対応しながら１年を経過し、【モデルに少し近づく】ことができたと感じていた。

【モデルとする看護師や看護師の行動】は「患者のところによく行く」「患者が話しやすい存在」「患者のことを考えて動く」「患者への関心が強い」「患者に負担が少ない技術」「信頼関係の構築」「予測して関わる」「リーダーシップをとる」「仕事がはやい」「無駄がない」であった。

（３）看護学生へのキャリア形成に向けた取り組み

プログラムにおいて、看護学生のロールモデルとなる看護師に大学卒業後から現在の活動を語ってもらうことで、プログラム参加者は、【経験談を聴くことが貴重と感じる】【卒業後のプロセスを知る】【自分と向き合う】【将来を考える材料となる】【今の自分の課題を持つ】【看護師としての目標を持つ必要性を知る】と感じていた。

【経験談を聴く】は「貴重な話が聞けた」「もっと聞きたかった」から構成された。【卒業後のプロセスを知る】は「実際の現場を知ることができた」「成長過程を知ることができた」などから構成され、【自分と向き合う】は「今の自分と向き合う」「今の自分と看護師とを比べる」など、【将来を考える材料となる】は「将来を考えるきっかけになった」「将来のイメージができた」など、【今の自分の課題を持つ】は「しっかり勉強したい」「実習を大切にしたい」など、【看護師としての目標を持つ必要性を知る】は「理想の看護師像を持つことが大切と感じた」「目標を持つことが大切と感じた」などで構成された。

学生は先輩看護師から【経験談を聴く】ことで【卒業後のプロセスを知る】。その結果【自分と向き合うこと】や【将来を考える材料となる】ことで【今の自分の課題を持つ】【看護師としての目標を持つ必要性を知る】ことができていた。2 年生を対象とした先輩看護師の語りを聴くプログラムは、学生の内省および学習態度について、課題を見出し、看護モデルを活用することで、キャリア支援の一助となることが示唆された。

文献

鍋田智広、水田真由美、山田和子、北島麻衣、松田憲幸（2013）：看護系大学生のロールモデル設定に及ぼす実習経験の影響．日本医学看護学教育学会誌，増刊号，26

鍋田智広、水田真由美、山田和子、松田憲幸（2015）：看護学生のロールモデルの実証的調査－臨地実習の経験が看護系大学生の学習目標の内容と達成のための自己調整に及ぼす影響－．日本医学看護学教育学会誌、査読有，24（1），42-48

Wiseman, R. F.(1994) : Role Model Behaviors in the Clinical Setting. Journal of Nursing Education, 33(9), 405-410

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 中島珠生、水田真由美、辻あさみ、内海みよ子、芝瀧ひろみ、池下ゆかり：ユニフィケーションによる看護学生へのキャリア形成に向けた取り組み．和歌山県立医科大学保健看護学会誌、査読有、9、2018、16-23

〔学会発表〕（計 3 件）

① 水田真由美、山田和子、鍋田智広、松田憲幸：新人看護師のロールモデルの活用プロセス、第 28 回日本医学看護学教育学会学術学会、2018

② 中島珠生、水田真由美、辻あさみ、内海みよ子、芝瀧ひろみ、池下ゆかり：ユニフィケーションによる看護学生へのキャリア形成に向けた取り組み、第 9 回和歌山県立医科大学保健看護学会、2018

③ 水田真由美、山田和子、鍋田智広、松田憲幸：看護学生のロールモデル形成におけるメタ認知に関する研究. 第 26 回日本医学看護学教育学会学術学会、2016

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
水田　真由美（MIZUTA, Mayumi）
和歌山県立医科大学保健看護学部・教授
研究者番号：00300377

(2)研究分担者
山田　和子（YAMADA, Kazuko）
和歌山県立医科大学大学院保健看護学研究科・特任教授
研究者番号：10300922

松田　憲幸（MATSUDA, Noriyuki）
和歌山大学システム工学部・准教授
研究者番号：40294128

鍋田　智広（NABETA, Tomohiro）
東亜大学人間科学部・准教授
研究者番号：70582948

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
中島　珠生（MAKASHIMA, Tamao）
辻　あさみ（TSUJI, Asami）
内海　みよ子（UTSUMI, Miyoko）
芝瀧　ひろみ（SHIBATAKI, Hiromi）
池下　ゆかり（IKESHITA, Yukari）